

アジア系アメリカ小説が描く戦争と 「不都合な（正しくない）被害者たち」

中村理香

アジア系アメリカと「不都合な／正しくない被害者たち」

2021年4月30日にオンラインで開催された研究集会“Trauma and Memory in Vietnamese America: Anti-Communism, Authoritarianism, and Anti-Asian Violence in a Divided Community”の趣意文には、アジア系アメリカにとって「不都合な（正しくない）被害者」とも言うべき人々への言及がある。すなわち、同年1月6日の連邦議会議事堂占拠事件で、南軍旗を含む白人至上主義のエンブレムとともに旧南ベトナム国旗を掲げ、議事堂襲撃に参加したトランプ支持者のベトナム系アメリカ人である¹。コロナ禍でアジア系へのヘイト・クライムが増大するなか、その元凶ともいえるトランプ大統領を支持し、アメリカ政府によるベトナムへの軍事介入を礼賛して憚らないこれらベトナム系の人々は、ベトナム反戦を設立の基本理念とし、米国でのアジア系へのレイシズムの打破を主目的に掲げてきたアジア系アメリカ研究および運動にとって、この上なく「不都合な当事者」であることは間違いないだろう。

とすれば、上記のパネルが、これらの人々に対して運動の理念や正しさを一方的に押しつけ糾弾するのではなく、パネリストの一人 Viet Thanh Nguyen がかつて *positions* 誌で述べたように、アジア系コミュニティの構成員であるこれら「正しくない当事者」を語る言葉や、批判と共感のあり様を模索していることは重要に見える²。それは、米国における左派主導のベトナム反戦運動が——もちろんそれ自体はきわめて敬意に値するものである反面——それが定義する「正しい被害者」に当てはまらない被害当事者を生みだし、それらの人々を、かれらも米国の軍事介入が作り出した被害者であるにもかかわらず、周縁化させてきたことへのアジア系アメリカの応答であるように思われるからである。

実際、その意味ではアジア系アメリカが、運動やコミュニティにとっての「不都合な当事者／正しくない被害者」と向き合うのは、これが初めてではないことも想起に値する。たとえば、第二次世界大戦時の日系カナダ人強制収容をテーマとした日系カナダ作家 Joy Kogawa の *Obasan* は、収容への国家賠償を求めた日系リドレス運動ただなかの1981年に発表された小説だが、ここには、前述のベトナム系の人々と同様、コミュニティが推進するリドレス運動には賛同せず、加害者であるカナダ政府を擁護する「不都合な被害当事者」の存在が書きこまれている。小説は、日系コミュニティの権利回復のための「正しい抵抗（プロテスト）」には従事しないそれら日系人を一方的な批判や啓蒙の対象とするのではなく、何故かれらが運動に同調しない（あるいはできない）のか、しばしば沈黙を通して発せられるかれらの声に耳を傾ける。コガワの小説は、その意味で、政治運動を無効化するのではなく、むしろアクティビズムとコミュニティ内の多様な声（と沈黙）を緊張関係に置くことでそれらを複雑化する試みだと言えるだろう³。マイノリティ言説としてのアジア系アメリカ小説が、レイシズムへの抵抗（プロテスト）やコミュニティの権利回復といったアクティビズム的要素と完全には不可分ではありえない一方で、それらを複雑化してきたことも重要だろう。それは、「正義」や「人権」といったマイノリティ運動にとって不可欠な要素に、「文学」や「研究」がいかに関わりうるかを問うものと思われるからである。

本発表では、上記を踏まえ、アジア系アメリカの戦争小説が、運動やコミュニティの掲げる政治理念や目標に合致しない「不都合な当事者」や「正しくない被害者」をどのように描いてきたのか、第二次世界大戦を舞台とした日系およびコリア系アメリカの戦争小説二作、John Okada の *No-No Boy* (1957) と Chang-rae Lee の *A Gesture Life* (1999) を例に考察を試みた⁴。

引き取り手のない記憶と「正しくない被害者の物語」が問う戦争論理

まず、Okada の *No-No Boy* について、現在アジア系アメリカ文学の古典と見なされるこの小説は、主人公の徴兵忌避者 (draft resister) とその周囲の人々の生をとおして、終戦直後のアメリカ北西部の日系コミュニティを描くものである。発表では、小説が刊行された1950年代、強制収容という不正義のなかで従軍した日系人兵士らがアメリカの国民的英雄として礼賛され、愛国と多文化主義的同化の物語が進行する米国で、Okada があえてそのナショナルな祝祭的物語から除去される「不都合な当事者たち」を描いたことの意味を考えた。実際、*No-No Boy* には、多種多様な理由から兵役を拒否した日系人青年らや、従軍に対してアンビバレンスを抱く退役兵、さらには日本の軍国主義を支持する者らなど、JACL (Japanese American Citizens League) 等の当時の運動言説が掲げた「モデル・マイノリティ」の理想からはかけ離れた「不都合な日系人」が山のように登場する。Okada の小説はまた、過去を忘れ主流アメリカ社会に同化したいと願う日系コミュニティの意向にも反するものであった⁵。

発表では、国民共同体から暴力的に排除され市民としての権利を剥奪された日系人が、「敵兵」という日系人に代わる新たな国家安全保障上の脅威や、ノーノー・ボーイ、徴兵忌避者、日本の軍国主義を支持する者ら、「ジャップ」など、日系コミュニティ内外の「国家的他者」を名指し、かれらに異物性を代替させることで入手可能となる日系アメリカ市民権の構造や、これに付随する多文化主義的軍国主義に対する Okada の疑義を読み解いた。

No-No Boy の刊行から 42 年後の 1999 年に発表された Chang-rae Lee の小説 *A Gesture Life* は、アジア・太平洋戦争時の日本軍「慰安婦」制度にまつわる暴力とトラウマ的記憶を、現在は米国に居住する元対日協力者の朝鮮人皇軍兵士の視点から描いている。小説が刊行された 1990 年代は、韓国人サバイバーの金学順による名乗り出をきっかけに、日本軍「慰安婦」制度が国際的な注目を浴びた時期であり、米国でもコリア系を中心に当事者への共感と連帯を示す運動が高まりを見せていた⁶。また前述のように、日系人にとっての軍事愛国主義運動が主流アメリカ国家への同化のチャンスだったのと同様に、コリア系にとっての「慰安婦」リドレス運動も、被害当事者へのトランスナショナルな連帯に加え、マイノリティ米国市民であるコリア系が主流アメリカ社会で可視性を獲得する契機でもあったことは確認に値するだろう。発表では、そのような「慰安婦」リドレス運動の盛り上がりのなかで、Lee があえて植民地支配下の「対日協力者」という（明らかに）「正しくない当事者」の視点から日本軍「慰安婦」制度の暴虐を描き、「被害のなかの加害」という、より複雑な記憶としてこれを提示したことの意味を考察した。岩崎稔と長志珠絵の言葉を借りて言えば、「純粋で美しく自己を仮託しやすい」「モデル被害者像」⁷への意図的な対立項とも言える「被／加害者」を主人公とする Lee の小説は、そのような「正しくない被害者」の負ったトラウマを可視化するとともに、植民地支配下で行使される重層的な暴力を単純な二項対立を排した複層性とおして描く試みだとも言える。

戦争とそれに付随するトラウマ体験を、これら「正しくない／不都合な被害者」を介して描く両小説は、ある意味ではコミュニティの誰もが思い出さたくはない、引き取り手のない記憶を、小説＝フィクションというそれが最も安全に表出されうる形態をおして言語化する行為だとも言えるだろう。さらに戦争をめぐる言説が、善対悪、敵対味方、被害者対加害者に世界を二分化し、その二分法のもと、加害や悪、非人間性を「敵」に投棄し自らの「正しさ」を拡大再生産するものだとすれば、二小説が描く「正しくない被害者」の物語は、戦争自体のロジック、すなわち「正しい被害者の私たち」に内在する二分法や優越性、戦争遂行に不可欠な同質的でナショナルな「私たち」の物語を脱臼する試みでもある。最終的に、Okada と Lee という二人のマイノリティ作家が紡ぐ戦争小説に共通するのは、戦争する国家が作り出す「私たち」という国民共同体への加入の誘惑と幻想への疑義であるように見えた。それは、国民共同体から排除されてきたマイノリティが別の排除すべき他者を作り出し名指すことで入手可能となる戦時下の「国民的私たち」の一体性や、あるいは「加害者」を名指し「私たち」と区別することで獲得可能となる「私たち」の純潔性や道義的優位性を解体する試みでもある。二小説が描く「不都合な被害者たち」が思い起こさせるのは、そのようには二分化できない現実であり、戦争の遂行と継続に不可欠なそれら物語の虚構性にはほかならない。発表では、二小説が、戦争の掲げるこれら論理への対抗言説として作動する可能性を探った。

註

¹Weatherhead East Asian Institute, “Trauma and Memory in Vietnamese America: Anti-Communism, Authoritarianism, and Anti-Asian Violence in a Divided Community” <<https://www.youtube.com/watch?v=kfd7wRD-geE>>.

²Viet Thanh Nguyen, “Refugee Memories and Asian American Critique,” *positions: asia critique*, 20 (3) 2012: 911-942.

³Joy Kogawa, *Obasan* (New York: Anchor Books, 1981). 詳細は、中村理香「損傷を「言葉」にすること——『おばさん』における運動言説（アクティヴィズム）と外傷（トラウマ）言語」、石原剛他編『憑依する過去——アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』（金星堂、2014年）81-113頁を参照されたい。

⁴John Okada, *No-No Boy* (1957; U of Washington P, 1979); Chang-rae Lee, *A Gesture Life* (New York: Riverhead Books, 1999).

⁵Frank Abe, “Introduction: Saying ‘No! No!’ to the Community Narrative,” in Frank Abe, Greg Robinson, and Floyd Cheung, eds., *John Okada: The Life and Rediscovered Work of the Author of No-No Boy* (Seattle: U of Washington P, 2018) 3-9; Greg Robinson, “A Seed in a Devastated Landscape: John Okada and Midcentury Japanese American Literature,” in Abe et al, eds., 237-250.

⁶中村理香「「加害者の物語」——チャンネ・リーの『最後の場所で』が示す「慰安婦」像と「正しくない被害者」の心的損傷」、中村理香『アジア系アメリカと戦争記憶——原爆・「慰安婦」・強制収容』（青弓社、2017年）197-225.

⁷岩崎稔・長志珠絵「「慰安婦」問題が照らし出す日本の戦後」、成田龍一・吉田裕編『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争——岩波講座アジア・太平洋戦争 戦後篇』（岩波書店、2015年）246頁。